1991年6月5日発行（毎月1回5日発行）1984年2月10日第三種郵便物認可　ISSN 0286−4479

POLAND MONTHLY ／ BIULETYN POLSKI

ポーランド月報

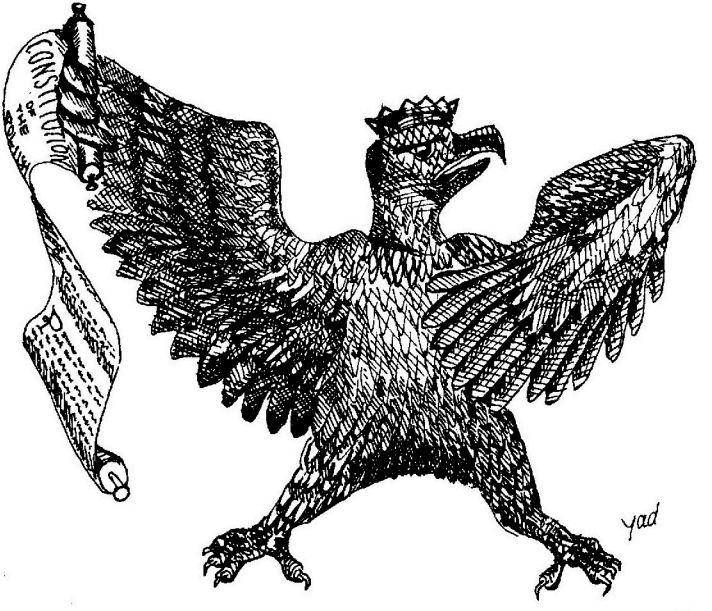
1991年
6月号
（通巻111号）
400円

巨大な政治的神話としての「連帯」

アダム・ミフニクに聞く

なぜポーランドはいま

5月3日憲法を高く評価するのか



© André Jaffie

☆☆　ポーランド月報　1991年６月号（通巻111号）　目次　☆☆

巨大な政治的神話としての「連帯」……3
アダム・ミフニクに聞く――工藤　幸雄／武井　摩利
なぜポーランド人はいま５月３日憲法を高く評価するのか　マルチン・クラ…6
「連帯」勢力の政治的再編成
民主連合の結成：恋愛ぬきの結婚　イエジ・ヴィソツキ……13
民主連合：多元的で中道志向の路線　『ジチェ・ワルシャウィ』紙から……15
民主連合の創立大会：３つの政治潮流が１つの党に
『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙から……16
ブヤクの新党：社会民主運動　『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙から……17
ポーランド日誌　1991年２月22日～３月20日……18

ポーランド資料センターの解散に伴う措置について

前号でお知らせしたとおり、ポーランド資料センターは本年７月末日をもって解散します。解散にともない、債権・債務などを以下のとおり清算しますので、ご了解下さい。

1　会費・定期購読料金の残金清算

会員・読者の１人ひとりについて終刊号（予価＝1500円）までの費用を差し引いた残金を算出し、これを以下のいづれかの方法により清算する。

①現金で返却する。

②債務支払その他のために寄付を受ける。

［ちかく、残金を精算のうえ、どちらの清算方法を希望されるか、おうかがいします］

2　所蔵資料

帳簿価格（約80万円）で［ソ連・東欧］資料センターに売却する。ただし、

①散逸させずに、効果的に活用する、

②一定期間、旧ポーランド資料センター関係者に利用の便宜をはかる、

の２点を条件とする。

3　『ポーランド月報』等出版物の在庫

創刊準備号～終刊号をセットにして希望者に売却する（約30セット。予価＝３万円）。

4　債務支払

以上の処理による収入を債務支払費用の一部に充てる。

なお、債務の主なものは次のとおり。

①会費／定期購読料残金	約 20万円
②翻訳料未払分	約160万円
③事務局交通費未払分	約 55万円

巨大な政治的神話としての「連帯」

アダム・ミフニクに聞く——工藤幸雄／武井摩利

Rozmowa z Adamem Michnikiem

【編集部注】 4月下旬、アダム・ミフニク氏が来日した。4月22～24日に京都で開かれたＩＰＩ（国際新聞編集者協会）年次総会に、『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙編集長としてパネリストの１人を務めるべく招かれたものである（同総会は南アフリカのネルソン・マンデラ氏が参加したことでニュースにも取り上げられた）。4月24日、短い滞在期間のなかから時間をさいていただき、本誌とのインタビューが実現した。聞き手は工藤幸雄（ポーランド資料センター代表幹事）と武井摩利（同事務局員）。

神話としての「連帯」の崩壊

問　どうなのでしょう、現在のポーランドの政治状況は。

ミフニク　それは何とも一般的な質問で、大論文でも書かないと収まりきらない。もっと個別的な質問をして下さい。例えば、あなたは「現在の日本の政治状況をどうみるか」と聞かれたらどうします？（笑）

問　では、今、「連帯」は分裂してどうなったのか？

ミフニク　労働組合としての「連帯」は、新しい政治状況のなかで自らのあるべき形態を捜し求めたが、ついに見出せなかった。そしていろいろな形に分かれた。その分かれた「連帯」がどのような形で決着するのか、まだ誰にもわからない。だから、「連帯」をめぐる現状は不透明で、何もよく見えてこない。一方、巨大な政治的神話としての「連帯」、抵抗の力・変革の力としての「連帯」は存在をやめた。いつからか？　ワレサの選挙機関になった時からだ。選挙機関は神話ではありえない。

問　そのワレサ大統領はどうですか。

ミフニク　彼が大統領になってまだ日が浅い。評価するには時期尚早だ。とはいえ、これまでのところ彼は慎重だ。選挙戦中の彼の発言から人々が予想していたところに比べて、実際に彼がしたことはずっと少ない。

問　バルツェロヴィチ蔵相の経済政策は？

ミフニク　良い政策だと思う。たしかに困難な政策だが、それでもポーランドはポスト共産主義諸国のなかで唯一、商店で何でも買える国だ。銀行へ行けばズウォティをドルに換えることもできる。ポーランドでは、商売をして、もうけることができる。ただ、全員が平等にもうかるわけではなく、うまくいく人といかない人が出る。うまくいかない人の方は欲求不満となり、批判的・攻撃的になる。例えば、日本でなら赤字企業が倒産するのは明らかなこと、理の当然とされるだろう。ところがポーランドでは、これまでの慣習から、いかに採算が悪かろうが役に立たぬものばかり生産していようが、企業は存続しなければならないという意識がしみついている。もし倒産したら、失業だ、社会的不公平だとの声があがる。確かにそうだ、失業した人は不幸な目にあっている。だが、その企業をつぶさずに維持しようとすれば、われわれ自身の家計が余計な負担を強いられねばならない。なぜならワレサは赤字企業に財政援助する個人的援助金など持っていないのだから。そういう意味で、バルツェロヴィチの政策は、不満や反発はあっても正しい道であり、今進路を模索

アダム・ミフニク　1946年生。60年代よりヤツェク・クーロンらとともに反体制運動に加わる。ワルシャワ大学で歴史を専攻したが、68年3月事件で放校処分。76年、労働者防衛委員会ＫＯＲのメンバーに。80年の「連帯」誕生後は顧問として活動し、81年12月の戒厳令布告と同時に拘留、後に正式逮捕・起訴されるが、84年夏に恩赦で釈放となる。89年の円卓会議に「連帯」側代表の1人として参加。同年5月に創刊の日刊紙『ガゼタ・ヴィボルチャ』編集長となる一方、6月の国会選挙では下院に立候補して当選する。つごう6年の獄中経験を持つ。平明にして透徹した文章で状況を鋭く分析する、ポーランド有数の慧眼の論客。夫人と3歳半の男の子がある。

しているポスト共産主義にとっては唯一の政策だ。

政治舞台の混沌

問　複数の政党ができているようだが。

ミフニク　こっちは経済よりもっとひどい状態だ。今は事実上自由に政党を結成できる。ところが人々はあまり政党を作りたがらない。その大きな理由は、人々が旧体制下で政党システムというものにひどい嫌悪感を抱いてしまったことだ。われわれは政党の新しい機能のしかたを考え出さねばならない。組合としての「連帯」は別として、社会運動としての「連帯」は分裂し、新しい構造はまだ出来ていない。そこには片やワレサ支持派、片やマゾヴィエツキ支持派、そしてあとは空白の舞台があるわけだ。

問　中央同盟やＲＯＡＤ（市民運動―民主行動）はどんな役割を果たしているのだろうか。

ミフニク　ご承知のとおり、私は中央同盟に対して極めて批判的な見解の持ち主で、彼らをデマゴギー的スローガンを声高に叫ぶもめごと好きの連中とみなしている。彼らは「改革加速化」を言いつづけているが、実際にはワレサ大統領就任後も何も加速されていない。――つまり、私は今の質問に対しては、客観的な立場にいないので何とも答えにくい。

ヤルゼルスキへの評価

問　80年代半ばにあなたが獄中で書いた文章では、ヤルゼルスキに対して極めて否定的な評価がなされていた。独裁者の将軍といったような。だが円卓会議と民主化を経た今は、それなりの評価を与えておられるようだ。かつての断定的な否定的表現は、心底そう考えてのことだったのか、それともイデオローグとしての戦略だったのか。

ミフニク　ヤルゼルスキに対する私の姿勢は非常に複雑だ。まず、いま現在私が彼を評価するとすれば、戒厳令ではなくその後のことを問題とする。彼が民主主義への道を開いたという点をだ。この点で私は彼を高く評価している。一方、戒厳令に関していえば、私はシェワルナゼと会談したし（本誌5月号参照）、日本でつい先日ヤコブレフとも話したが、2人とも「ヤルゼルスキがいなければソ連はポーランドに介入した」と言明した。これを聞いて私は以前の自分の見解を少し相対化して見るようになった。いや、意見を翻したとか、前に書いたことを後悔しているとかいうことじゃない。あれは政治闘争だった。彼（ヤルゼルスキ）

は私を獄中に放り込んだ。私は自分が正当なものごとを守り弁護していると考えていた。たとえあの時点でいまと同じだけ周辺国（ソ連）の考えを知っていたとしても、舌鋒をゆるめず同じことを書いたろう。私は、戒厳令はポーランドにとって不幸な事態だったと考えていた。われわれはそのために8年をロスしなければならなかった。もっと別の解決法を見出すことが可能だった。その気になればできたはず、ないし試してみることはできたはずだ。ところがヤルゼルスキは、根本的には共産党の指導的役割を守ろうとした。これはわれわれにとって受け入れがたいことだった。そういうことだ。つまり、あの当時の彼に対する私の考えは、特にシェワルナゼやヤコブレフとの話によって、今では若干相対化されている。そして、その後に彼がやったことについては、肯定的に評価している。私はこのことを隠しだてするつもりはない。昨年12月に彼が大統領を退任するに際しても、『ガゼタ・ヴィボルチャ』に「将軍への送別の辞」という論文を書いた。

問　ポーランド国会選挙はいつ行われるのか。

ミフニク　たぶん10月だろう。

下院議員はやめて、物書きに戻る

問　あなたはまた立候補するのか？

ミフニク　いや。私は知識人であり物書きだ。なんで議場にすわって退屈な思いをする必要がある？　前回の選挙で下院に出馬したのは、自由を求めての共産主義との戦いの一環としてだった。今や自由はわれわれのものだ。私は自分本来の仕事に戻る。本も書きたいと思っている。

問　あなたの宗教は何か、うかがってよろしいだろうか。

ミフニク　うーん。信仰は持っているが、どの宗派にも属していない、といったらいいかな。私は無神論者じゃない。自分なりの宗教的考えを持っている。ただ、その考え方は、既成のいずれかの宗教に収まっているわけではないんだ。いわば、教会なきクリスチャンというところだ。

［文責：編集部］

なぜポーランド人はいま5月3日憲法を高く評価するのか

マルチン・クラ

Dlaczego Polacy Dziś Cenia Konstytucie 3 Maja, Marcin Kula
Gazeta Wyborcza, 4 maja 1991, Warszawa

【編集部注】 5月3日は憲法記念日。これは日本だけでなく、奇しくもポーランドでもそうである。1791年5月3日、ワルシャワの王宮で採択された「統治法」、通称「5月3日憲法」は、ほぼ同時期に採択されたアメリカ合衆国憲法やフランス革命の9月憲法にも比肩しうる、近代国家への移行を意図した憲法であった。18世紀半ばのポーランドは内政の混乱から国力を落とし、1772年にロシア、プロイセン、オーストリア3国による第1次分割の憂き目にあったが、これを契機に国内の改革運動が開始され、列強の横槍やロシアと結んで私的利益の追求にはしる大貴族らの存在に悩みながらも改革の動きは高まり、ついに国王を動かして5月3日憲法の成立を見たのだった。しかし反国王派の大貴族グループ（タルゴヴィツァ連盟）の要請でロシア軍が介入、改革は圧殺され、ポーランドは第2次（1793）第3次（1795）の分割によって地図上から姿を消す。以後1918年まで亡国の歴史が続くのである［なお、本文中の大セイムと4年議会は同じもの］。

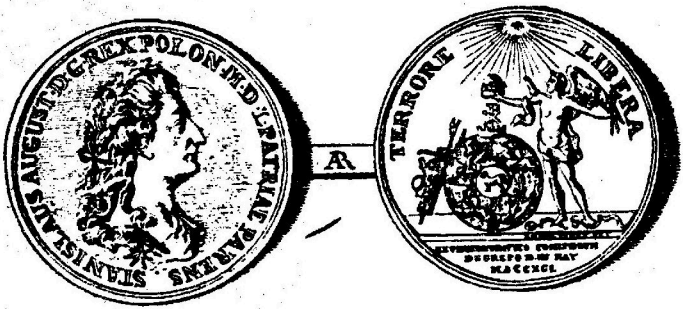
今年はこの5月3日憲法200周年にあたる。今もなお人々にいとおしんで語られるこの憲法の人気の秘密を、ポーランドの歴史家が考察した文章を、『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙から訳出する。なおこれは、もっと長い論文からの抜粋であると記されている。

著者のマルチン・クラ教授は歴史学者・社会学者で、ワルシャワ大学歴史学研究所およびポーランド科学アカデミー歴史学研究所所属。近著に"Narodowe i rewolucyjne" (Biblioteka Więzi-Aneks, Warszawa-London, 1990)がある。

1 消化されぬものとなるべし……

ひとつの回想から始めるとしよう。ポーランドに戒厳令が敷かれて数カ月後、1982年5月3日のことだ。われわれ歴史家のグループは、ワルシャワの王宮で、5月3日憲法をテーマに話し合った。講演をしたのは18世紀の諸問題の権威、エマヌエル・ロストヴォロフスキ教授（惜しいことに今や鬼籍に入られた）。教授はとくに、大セイムによって着手された国家再建事業が〔ロシア軍の介入で〕暴力的に中断させられたことを話され、当時ルソーがポーランド人に贈った言葉「呑み下される運命を避けられぬのなら、消化されぬものとならねばならない」で講演を締めくくられた。その時だ。王宮前広場から、デモ隊が蹴散らされる音が響いて来た。講堂内の人々はみな窓際へ駆け寄った。眼前に繰り広げられた光景は――警察の攻撃、放水銃からほとばしる水、「消化されぬものとなるべく奮闘するもむなしくついに追い散らされる若者たち、始めは人々で埋まり、やがて空っぽになった広場、水びたしの敷石に残された色々な道具や旗、そのまん中にとまる救急車。これらは、安易な類推やなぞらえを排する職業歴史家をしてすら、今しがた聴いた講演のなかのおよそ200年前に発せられた言葉と、今日ただいまの現実とを関連づけて考えさせずにはおかぬものだった。

そう、王宮の窓越しにその光景を見たとき私がこう連想せずにいられなかったこと自体、この文章のタイトルに掲げた問い「なぜポーランド人はいま5月3日憲法を高く評価するのか」への答えの1つである。歴史的状況がいくばくか似ている



5月3日憲法の採択を記念して発行されたメダル

ということで、現代の関心は大セイムと5月3日憲法の方へ向いていた。しかしわれわれは、問題をより体系的に見つめてみよう。そうするだけの価値はある。ついにわれわれは、広範にして組織的、そして何よりも自発的な結びつきを、200年前のあの出来事との間に得るに至ったのだ――その出来事は、フランスにおいてフランス革命が果たしたほどに近代～現代の礎をなすものではなかったとしても。

2　共産主義体制に嫌われた記念日

「なぜポーランド人はいま5月3日憲法を高く評価するのか」の問いに体系的な答えを見出そうとすれば、まず、ポーランド社会は一般に歴史に対してひどく敏感であるという点から始めねばならない。ポーランド社会はおそらくヨーロッパのどの国の社会にも増して歴史への関心が強い。アイルランド社会でさえこれほどではなかろう。私はフランス革命200周年祝典の時期にフランスにいたが、私の目をひいたのは、フランス人にとってこの歴史上の出来事が何よりも遊びの口実、商売のうたい文句、自分たち（残念ながら当時は私もその中に含まれていたのだが）にカネを落としてくれる観光客向けのキャッチフレーズであるということであった。ポーランドでは過去に対するこうした態度は考えられない。われわれにとって過去とはもっと厳粛なものだ。

そうした歴史意識にも増して、5月3日憲法に対する感情に好都合に働いた直接的事情は、毎年5月3日にめぐってくる記念日に対して共産主義体制が取った態度であった。体制は憲法そのものには肯定的な立場を取っていた。18世紀ポーランド社会の進歩的潮流の成果として評価し（これは事実そのとおりである）、歴史教科書でも好意的に書いていた。だがまた、「（この憲法は）何の疑問もなしに受け入れることはできない」といった発言が政府当局から出されたのも事実であった。逆説的なことでもなんでもなく、例えば5月3日憲法の本文の出版は長い間極めて困難であった――その理由のひとつは、スタニスワフ・アウグスト〔当時の国王〕の称号であった。当然ながら憲法の冒頭に記されたその称号は、国王が今の国境よりずっと東側の土地までも治めていたことを読

み手に思い起こさせるものだったのである。

このように、憲法そのものに対しては――アンビバレントな要素こそあれ――肯定的に語ることができたが、こと5月3日という記念日に関しては、共産主義体制は断固として否定的態度を取った。その理由はひとつには、1939年より前にはこの日が公式の祝日であり、その祝日に対して反左翼諸派の大いなる支持があったためである。また私は、この日が5月1日のメーデーとあまりにも近すぎることも、当局の態度に影響を与えたのではないかと考えている。彼ら〔当局〕の祝日とみなされているもの（現実には彼らだけではなく様々な政治潮流に属する祝日なのだが）に、競争相手があってはならなかったのである。ましてそのライバルが戦前の国の祝日だなど、決してあってはならぬことだったのだ。共産主義体制は、とりわけ初期において、人々の精神構造を作り変えようとした――人々を5月1日の赤旗と、すなわち彼ら体制側の伝統と結びつけようとしたのも、その一環であった。初期の共産主義が自らの伝統を他の運動と切り離して考え、伝統を他と分かち持つのを嫌っていたことは記憶に値する。そう、共産主義は最初、自分たちの伝統に帰することのできる事項を強調し、例えば5月3日憲法の時代でいえば、王宮で採択された憲法よりもクラクフの市場広場でのコシチューシコの宣誓やポワニエツ宣言、つまり親人民的でほとんど反シュラフタ的〔シュラフタはポーランドの士族〕なものごとを重視した。共産主義体制が人民ポーランドの起源をより広い範囲の歴史に――時にはいわゆる左翼とはかけはなれた歴史上の部分にも――求めるようになったのは、かなりたってからである。

戦後ポーランドで、5月3日憲法の祝賀にはっきりと禁令が出されたことがあったのかどうか、私には確信できない。また、5月3日がどの程度迅速に国の公式祝日からはずされたのかも、よくわからない。マリア・ドンブロフスカは、この新体制建設期の実際の様子を興味深い筆致で描いている。1947年5月4日の日記に、彼女はこう書いた（この頃彼女はヴロツワフで暮らしていた）。

『昨日ここの警察が大学に押し入り、5月1日に掲げて3日までそのままにされていた国旗を撤去するよう命じた。5月3日の祝日は廃止されたというのがその理由』。翌1948年の5月3日の日記には（この時はワルシャワにいた）、次のようにある。「タクシーで帰宅。途中運転手が唐突に『ねえお客さん、今日は国旗掲揚しちゃいけないんですかね？』と尋ねたので、私たちは『もちろんいいのよ』と答えた。『新聞には、5月1日に掲げた旗は5月3日までそのままにして良いという公式談話さえ出ていたわ。見てごらんなさい、官公庁の建物も全部、今日も旗を出しているでしょう。』『そうかね？』と運転手。『じゃ、なんだって警察は俺に旗をはずすよう命令したんだろう。』『そんなの聞かずに新聞の公式声明に従えばいいのよ。見て、どこでも旗を出しているじゃない。』『だけどね、俺はプラガ〔ワルシャワ市内のヴィスワ側東岸地区〕に住んでるんだが、そこじゃあダメだって言いやがったんだ』。私は去年の5月3日にヴロツワフで警察が大学に旗をはずすよう命じた事件を思い出した。タクシーを降りて料金を払った後で、運転手はもう一度私たちに呼びかけた。『お客さん、今日旗を出してもいいって公式発表があったってのは本当に本当なんですかい？』『本

1791年5月3日のセイム議場。カジミエシュ・ヴォイニャコフスキの絵から。

当に今日は祝日よ。発表はちゃんとあったわ』『そいつを知りたかったんでさ。今から家へ車を飛ばして、旗を掲げてこようと思ってね』」。

時とともに5月3日の記念日に対する体制側の態度は和らいでいった。他の様々なものごとと同様、5月3日は禁断の果実ではなくなった。共産主義時代の末期には、ある種の祝日としての性格を取り戻しさえした――統一労働者党と密接な関係にあった民主党が5月3日を自党の祝日と宣言するという、いわば裏口からの公認の形ではあったが。しかしそのはるか以前から、5月3日は反体制派のシンボルになっていた。マリア・ドンブロフスカは正しくこのことを予見していた。先に引用した彼女の日記のうち最初の方（47年5月4日付のもの）は、次のような文章で終わっている。「この日〔5月3日〕は、ツァー時代と同じように秘かに祝われるようになろう」。そして2番目のタクシー運転手との会話編も、同様の考察で締めくくられている。「この実直な人物が、5月3日の“降格”をかくも気にかけていると知って、私の心は揺り動かされた。私はこれまで、それほどにこの祝日を崇拝したことはなかった。ところが今や、政府が不用意なへまをしたために、5月3日はそれにふさわしい姿に――人民の祝日に――なったのだ」。

戦後新体制の最初の時期である1946年の5月3日、クラクフその他の都市で反共産主義のデモがあった。共産主義末期の1988年5月3日、私はアルゼンチンのブエノスアイレスでポーランド移民が開いた5月3日憲法記念式典に参加し、この日が共産主義政府により禁じられた祝日であること、当式典には人民ポーランドからの公式使節の列席など必要ないことなどが演壇で語られるのを聞いていた――ついでに言えば、遺憾ながら、私こそまさにその「公式使節」の1人であった、私は公的な形でその場にいたのだから。46年から88年までのすべての5月3日が人々の記憶にひとしい重みで残っているわけでは、もちろんない。と同時に、人々がその年月の間ただ共産主義の倒れんことをのみ念じ続けていたというのも、また真実ではない。しかしこうは言えるだろう、共産主義に対する抗議運動の盛り上がった時期には、きまって5月3日は求心力あるシンボルとして浮上した。ドンブロフスカの予見したとおり、5月3日は本当に「人民の祝日」となったのであった。ただ、そうなるにあたっては別の要因もまたいくつか働いていた。

© Tomasz Wierzejski/Gazeta Wyborcza

3　言葉を横取りされた労働者運動の選択

その「別の要因」の第1として、抗議運動、なかんずく労働者運動が、自身の使うべき言葉を体制によって簒奪されてしまったという事情があげられる。労働者の抗議運動が伝統的に用いていた用語は、労働者階級から生まれたと自称する体制の専有物とされてしまった。いかなる社会運動といえども、自身の言葉、シンボル、祝日、伝統なくしては立ちゆかない。それゆえにポーランドで70年代末から80年代初めにかけて生まれた労働者運動は、民族のシンボルと伝統を手にとった。付言すればその現象は今日なお続いている。

70年代、ワレサはおんぼろの自家用車のウィンドーに、王冠を戴く鷲の紋章と「5月3日憲法」の文字のステッカーを貼っていた〔王冠を戴く鷲

は戦前のポーランドの国章で、社会主義体制下では王冠がはずされて鷲だけになったが、89年の民主化の後に旧に復した〕。また彼は、5月3日の記念日について書かれたビラを配付したかどで、何度か警察に48時間拘置の目に遭わされている。当時のポーランドの労働者運動にとって、伝統的な労働運動のシンボルを使うなどは論外のことであった。なぜならそうしたシンボルは、彼らの抗議相手たる体制側のシンボルであったのだから。この筋からいけば、「連帯」が共産主義の赤い祝日であるメーデーの祝典に参加するのは、少々おかしなことになるわけであった。そのため、当初「連帯」は組合員に、メーデーには「仕事を休んでのんびり」するよう勧め、自分たちの祝日やデモ行動は5月3日にずらしていた。時を経て独立自治労働組合として機能するようになると、「連帯」はようやく、メーデーもまた自らの手に取り返すべき労働運動の伝統の一部であると認識し始め、当局の挙行する公式メーデー式典に対抗して非公認メーデー行進を組織するようになった。そしてこうした非公認デモは、当局によって――時には徹底して、時には適当に――弾圧された。

4　民族的要素

5月3日憲法の伝統がいまの世で広く受け入れられるに至った第2の要因は、80年代の抗議運動を貫いた民族的な横糸の存在であった。その結果、国の歴史のうちで、共産主義につながると思われる潮流以外のすべてが肯定的かつ価値あるものとして評価されることとなった（そのため、歴史の中で互いに敵対しあっていた勢力の両方に対して、現代の人々が忠義や尊敬の念を抱くというパラドックス的状況さえ生まれた）。5月3日憲法の場合、肯定的評価はとりわけ高く大きかった。前述のように1939年以前は国の祝日であり、さらに同じ5月3日が教会では「ポーランドの聖母たる聖処女マリア」の祝日にあたっている。今日、5月3日憲法への言及が重大な問題を起こすことはない。それには、おそらく何よりも、5月3日憲法誕生時の状況とわれわれの生きている時代の状況とが類似している事情がはたらいている。約200年の間を隔てたこの2つの時代、ポーランドは国が長い坂道を転がり落ちてゆくのをくい止めようと力を傾けた。どちらの時代にもその手段は改革への着手であり、そこには体制側や国内の反改革派の後盾である大国ロシアに対抗するという要素が含まれていた。1981年12月13日の戒厳令で、類似性はより強まった。国を救い改革しようとの試みが、いつかと同じように、東の隣国の利害に従って動く連中、東に仕える連中の手によって踏みにじられた――あらゆる事象がそう語っていた。だからこそ1982年5月3日、戒厳令後初の5月3日、途半ばにして三国分割によりついえた18世紀の改革事業の記念日、人々はデモをせずにいることはできなかった――そしてその後の年にも。

当時多くのポーランド人が信じていたこの類似が皮相的なものであったのかなかったのか、それは後世の歴史家が判断することになろう。私個人としては、ポーランドの共産主義運動がモスクワの帝国主義的利害の手先以外のなにものでもなかったという見方は単純にすぎると思う。大多数のポーランド人の望んだ形でではなかったにせよ、1945年以降もポーランドが国として存在したのは、ソ連の17番目の共和国になるよりはるかにマシだった。戒厳令を敷いた人々が漏らす、「そうすることでソ連の介入からポーランドを守った」という言葉の中に、いくばくかの真実が含まれていることも否定しきれない。

5　カトリック教会の影響

5月3日憲法の人気の第3の要因は、人々の共産主義嫌いとカトリック教会の代表する世界観とが交わる点から生まれた。この両者の強い影響によって、80年代の大衆運動は革命という形の解決法を否定した。80年代の運動が、例えば1905年のロシア革命と自らを結びつけて語ろうとは決してしなかったのも、1つにはそのためである。5月3日憲法の伝統は、既存の制度の中で秩序を保ち法を尊重しつつ国家を救済する道を教えていた。あまたの反「連帯」プロパガンダにもかかわらず、大衆運動は国民生活を無政府状態へとおとし入れようとしなかった。運動は、共産主義よりまとも

な、尊厳を持ち国民の利益のためにはたらく国家を作ろうと望んだ。そして5月3日憲法はまさにこの方向へ向けての活動の手本をなしていたのである。

6　近代性志向

5月3日憲法――もしくは4年議会〔1788年から4年間続いた国会。改革が論じられ5月3日憲法が採択された〕の業績すべて――の人気の第4の要因は、1980年代の運動が持っていた近代化志向である。とはいえ運動のすべてが新しいあり方を志向していたわけではない。共産主義になる以前の解決法の復古を叫ぶ声も存在したし、伝統や宗教や慣習に閉じこもる人々もいた。それもある意味ではゆえなきことではない――共産主義に対抗する力、共産主義から精神的に身を守るてだて、共産主義と闘う力の源、共産主義と自分は違うんだというしるし、そういったものを求めるうちに彼らはそこへ行きついたのだから。しかし当時の人々の間では、共産主義のおかげでポーランドは世界に遅れをとったという意識と、ヨーロッパに追いつきたいと言う願望とが非常に強かった。その気持ちは時には無邪気すぎるほどに単純な形で現れもした。例えば、共産主義さえなければポーランドは先進国になっていたに違いないとか、共産主義を倒しさえすれば短時日にヨーロッパの仲間入りできると確信する者もいた。そして5月3日憲法はここでも近代化の道のりの手本を示した。憲法を作った人々もまた、分割されヨーロッパに遅れをとったポーランドが、自分の足で立ちヨーロッパの水準に追いつくことを、願ってやまなかったのである。

これらの諸要因が、80年代ポーランドでの5月3日憲法の人気を決定づけたと私は考える。むろん、5月3日憲法を高く評価している人々すべてが上記のような自覚を持っていたというわけではない。あえて言えば、ポーランドでは歴史上の出来事がシンボルとして強い力を持っている割には人々の歴史知識はそれほどでもないのである。5月3日憲法もまた一種の象徴として機能し、必ずしも正確とはいえぬ形で信号化された内容をうつし出していた。象徴化された5月3日憲法の記憶

一九八二年五月三日の憲法記念日のデモ。ワルシャワ。

が、選択的な記憶であったことも強調しておきたい。多かれ少なかれ、人々はこの憲法に関して上に述べたような諸事情、諸要因は覚えているが、この憲法が理性を信じた合理主義の世紀、啓蒙主義の世紀の産物であることはさほど覚えていない。5月3日憲法はポーランドの民族意識の覚醒の果実とみなされているが、この憲法がフランス革命の結果ヨーロッパで活性化した巨大な知的潮流から生まれたことはしばしば忘れられている。

7　新生ポーランド、開かれた国たれ

5月3日憲法200年にあたる今年に、現代に即した新しいポーランド共和国憲法が制定されれば言うことなしであったが、残念ながら新憲法の誕生は少し遅れそうである。だが少しの遅れなど問題ではない。新しい憲法は必ずや、ポーランド民族の伝統が持つ諸価値をポーランド人自身が実現するための保証となるだろう。また、この憲法が現代世界の諸価値の実現に資することができるよう、起草者たちは心を砕くに違いない。ただ問題なのは、今日のポーランドにおける伝統的諸価値と、世界全体の諸価値とが、時として一致しないことである。例えば先日テレビで放映された公開討論会で、下院の憲法委員会委員長として出席したプロニスワフ・ゲレメク教授に対し、概要次のごとき質問が投げかけられた――「ポーランド人の大多数が実践的カトリック信者であるからこそ、憲法は実践的カトリック信者の手によって作られるべきではないと考えておられるのか？」〔ゲレメクはユダヤ人とされる〕。私個人はその質問を聞いて、アナクロニズムとの印象を受けた。

1990年12月22日、宣誓式をすませたばかりの新大統領レフ・ワレサが国軍最高司令官の地位に就任する式典が行われた。その演説の中で、大統領は兵士たちに向かい、式典の場が「ワルシャワの王宮の中庭、すなわち4年議会の議場にして5月3日憲法採択の場所」であることを思い起こさせた。また演説の別の箇所では、自身の責任はただ国民と歴史に対してだけでなく、何よりも神に対してあることを認識して職務を遂行すると力説した。

私は宗教に反対するものではない。ある活動が宗教的前提にのっとっているか理性的前提にのっとっているかの区別だけでは、その活動が道理にかなっているとかいないとかを予断することはできないとよくわきまえているし、理性とて信仰と同じくらいしばしば人々を誤謬へ導くと知っている。私は、各人の世界観は各人それぞれの問題であると考える。大統領とて、一私人としてはどのような世界観でもかまわない。しかし大統領の公的職務・国家活動に関しては、正直なところこのての信仰と伝統の押しつけには危惧を抱く。われわれは、独立回復直後のアイルランドのごとき保守的宗教国を作るのではなく、伝統を敬いながらも世界に開かれた国、宗教の発展を妨害しないと同時に非信者に対しても寛容な国を作ってゆきたいものだ。それはまた、5月3日憲法を作った人々が当時の世の中で作りたいと願った、宗教とポーランドの伝統に根ざしつつ近代的性格を備えた国の姿と同じなのである。

〔訳：武井　摩利〕

「連帯」勢力の政治的再編成

民主連合の結成：恋愛ぬきの結婚

イエジ・ヴィソツキ（『スポトカニア』紙）

Forming Coalitions: Marriage without Romance, Jerzy Wysocki, "Spotkania"
The Insider, May 2, 1991

「私に投票してくれたすべての人たちに訴えたい。私とともにとどまれ、われわれとともにとどまれ、と」。タデウシュ・マゾヴィエツキは昨年12月の大統領選挙で敗北を喫した直後、こう呼びかけた。

マゾヴィエツキは、自分に投票した人々をポーランド社会の「最も貴重な、心の広い、賢明な、責任感ある」部分と呼んでいる。彼のこの12月2日の呼びかけが民主連合――大統領選挙期間中のマゾヴィエツキ支持者たちの緩い連合体で、市民運動民主行動（ROAD）、民主的右派フォーラム（FPD）、そしてマゾヴィエツキ自身の選挙委員会が参加する――の始まりとなった。

民主連合の発足当初から、重要問題をめぐる見解の相違のゆえに、その参加者を単一の政党にまとめあげることの困難さは明らかであった。現在のような政治的情勢がなければ、ROADと民主的右派フォーラムは、共通の未来を追求するよりも、政治の舞台で対抗しあうのが当然と考えられていた。

民主連合の統一大会の準備過程は、1989年の円卓会議交渉を思い起こさせる。たとえ合意が成立したとしても、それはごく表面的で短命なものに終わることが確実である。

政党ではない？ROAD

ポーランド人は全国的な市民運動と対比される政党という概念を嫌悪している、という説を広めたのはROADの指導者たちであった。その奇妙な名称はここに由来する。ROADの副議長であるルドヴィカ・ヴェツ夫人も、ROADが「トップの戦争政策」によって結成を強制されたものであることを認めている。

「中央同盟［ワレサ派政治組織］に対抗するためにわれわれの隊列を固める必要があった」とヴェツ夫人は語る。

ROADは現在では政党として登録されているが、その政治的性格の特定は困難である。敵対者の多くからは「左翼」のレッテルを貼られているが、メンバーの圧倒的多数はそのような傾向を否定している。彼らの一部は、左翼、右翼といった分類そのものが時代錯誤であると考えており、別の人たちは体制の移行期にはそのような区別は消滅すると主張する。

「先進資本主義諸国のリベラル左派になれればと思う」。これはヤツェク・クーロンの発言である。

社会問題に対する敏感さがROADのメンバーを結び付ける共通項である。現在のビエレツキ政権に真っ向から対決するものではないが、ROADは社会福祉政策と社会的保護の拡大を主張している。

「この意味でROADは中道左派政党と呼ぶことができよう。ただし用語は厳密に定義されなければならない」とヴェツ夫人は言う。

ROADのメンバーの大半にとっては、「社会リベラル派」というレッテルが最もしっくりするようだ。彼らはこのレッテルは民主連合にもあてはまるとさえ考えている。もちろん、ROADの

それに近い政治綱領が採択されればの話だが。

民主的右派フォーラムの立場

民主的右派フォーラムは、ＲＯＡＤに比べればその政治的姿勢ははっきりしている。それは、近代的リベラリズムと保守主義、そしてキリスト教精神を基礎としている。民主的右派フォーラムは1970年代に活躍した２つの反対派グループの出身者によって結成された。若きポーランド運動（指導者はアレクサデル・ハル）と、1987年にクラクフで結成されたキリスト教リベラルのグループ、産業社会（指導者はタデウシュ・シリイチク）である。

民主的右派フォーラムは大統領選挙でタデウシュ・マゾヴィエツキを支持した唯一の右派政党であった。書記のカジミエシュ・Ｍ・ウヤズドフスキによれば、マゾヴィエツキ支持の決定は民主的右派フォーラムの指導者が何人かマゾヴィエツキ内閣に入っていたからであったが、同政権と民主的右派フォーラムとの間にとりわけ経済問題と外交政策の点で共通性があったことも重要だったという。

「トップの戦争政策」が宣言される前は、民主的右派フォーラムの現在の指導部はグダンスクの自由民主会議と緊密な関係にあった。両者は単一の政党を組織することさえ考えた。「トップの戦争政策」によってこの計画は破産したが、民主的右派フォーラムは今も自由民主会議との協力は可能だと考えている。

マゾヴィエツキ派の政治的色合いは？

民主連合の第３の構成要素、つまり「本来の民主連合」については、ただ１つ、それは最大のグループだと言えるだけである。それは統一大会にもっとも多数の代議員を送り、したがって、すくなくとも理論的には、連合の将来を決定する可能性がもっとも大きいグループと考えられる。

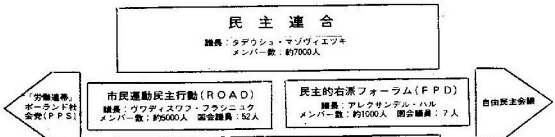
しかし、「本来の民主連合」の政治的色合いは何とも名状し難い。そのメンバーは、タデウシュ・マゾヴィエツキを支持しており、連合が均質な政党となることを望んでいる。だが、彼らはＲＯＡＤと民主的右派フォーラムのどちらに近いと感じているのか、また民主連合が単一政党に統合されず、あるいは議会選挙の後で分裂した場合はどうするのか、これらの点は明らかでない。

統一は可能か？

政治的にこのように多岐にわたる勢力によって構成される以上、民主連合の将来は予想が困難である。当初４月に予定されていた統一大会は５月に延期された。きわめて重要な多くの問題について見解の相違が存在する。連合という考え方そのものに疑いを示しはじめている人もいる。

その１人がアダム・ミフニクである。彼はブヤク派に考えが近いようだが、そのメンバーにはなっていない。現在の状況について彼はこう語っている。「マゾヴィエツキとハルとクーロンは、１つの政府の中でなら一緒に仕事ができる。だが、この３人が１つの政党の中にいる姿は想像できない。……ＲＯＡＤに民主的右派フォーラム、それに民主連合といった非常に立場の違うグループの人為的な統一は、ただ争いを生み出すだけだ。……恋愛ぬきの結婚よりも、結婚しない恋愛のほうがずっとよい」。

民主連合の事務局長ピオトル・ノヴィナ・コノ



民主連合をめぐる政治勢力配置

プカは、この多様性こそ、連合の欠陥ではなく、長所なのだと考えている。　彼によればこうである。「ポーランド国民はイデオロギーとドグマを拒否する。民主連合の内部構造はドグマ的、イデオロギー的な限界を超えて進むことを可能にする」。

議会制民主主義や資本主義的改革、法の支配などで合意するだけでは、首尾一貫した効率的な協力の基礎としては明らかに不十分である。国家諸機関の権限や国家の経済的役割、公的生活における教会の位置、などの問題が議論されねばならない。

目的の達成を非常に困難にするこうした見解の相違にもかかわらず、ＲＯＡＤと民主的右派フォーラムが民主連合の結成を決意するにいたった理由を理解するためには、それぞれのグループの綱領やイデオロギーの背後にあるものを見なければならない。諸政党間の微妙なイデオロギー上の違いなどは無視することが多い有権者の圧倒的多数にとっては、関心事は民主連合の指導者がタデウシュ・マゾヴィエッキであることである。ＲＯＡＤにも民主的右派フォーラムにも所属しないマゾヴィエッキの支持者たちが民主連合を１つに結び付ける。彼らは、いなくなることはあっても、分裂することはない。

民主連合の指導者に納まることが予定されているマゾヴィエッキは、均質的な政党という考えを好み、分派的対立は避けたいと思っている。

「冷静な力」。これは大統領選挙で彼のポスターに書かれた標語であるが、それは今もマゾヴィエッキの政治的信条であるように見える。

〔訳：水谷　暁〕

民主連合：多元主義的で中道志向の路線

『ジチェ・ワルシャウィ』紙から

The Democratic Union: pluralistic and center-oriented, Życie Warszawy
The Insider, May 2, 1991

民主連合創立全国委員会は４月13日の会議で、５月11日～12日に統一大会を開催することを決定した。また、民主連合が多元主義的団体であり、分派の存在を容認することを定めた規約草案も承認された。

大会代議員 100名で連合評議会を構成し、そのうちの80人は統一大会中に選出し、残りの20人は各派が選出するという条項ももうけられた。

連合への加盟を希望するすべてのグループの代表が記者会見に同席した。民主連合はタデウシュ・マゾヴィエッキとピオトル・ノヴィナ・コノプカが、民主的右派フォーラム（ＦＰＤ）はアレクサンデル・ハル、市民運動＝民主行動ＲＯＡＤはヤツェク・クーロンとヴワジスワフ・フラシニュクがそれぞれの組織を代表して出席した。

ＦＰＤ議長のハルは、全グループがタデウシュ・マゾヴィエッキと彼が代表する価値観のもとに結集しているのだから、彼こそが民主連合の本当の指導者だとして、彼とポストを争う者は誰もいないと続けた。ヤツェク・クーロンはそれに異議を唱えた。彼は、自らは議長ポストに立候補するつもりはないが、立候補したい人が他にもいるかも知れないとみなしている。

アレクサンデル・ハルは、ズビグニエフ・ブヤクならびにＲＯＡＤの中で自らを社会民主主義者であると宣言したメンバーが民主連合に参加しないのは幸いであると指摘した〔４月20日、ＲＯＡＤクラブのかつてのメンバーが社会民主運動という新党を結成した〕。その結果として、民主連合はポーランドの政治地図の中で中道の位置を占めることができた。

記者会見に同席した代表たちは、ジャーナリストの質問に答えて、「ポーランドのための連合」（さまざまな利害集団から成る連合を結成すべき

だとする提案）という考えが合意に達するためのひとつの試みであり、改革を継続させるとすればそれが必要である、と述べた。タデウシュ・マゾヴィエッキも「非攻撃的な連合の形成」を示唆し、それは選挙連合ではなく、破壊的な選挙キャンペーンを防ぐためのものである、と語った。マゾヴィエッキはさらに、「連帯」の伝統から生まれてきた彼の党は、労働組合が組合員のさまざまに異なる政治的選択を尊重することを望んでいる、と続けた。彼の考えによれば、『連帯』は1つの党だけの基盤になるべきではないのである。

〔訳：湯川　順夫〕

民主連合の創立大会：3つの政治潮流が1つの党に

『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙から

The Choice — Three Factions, One Party, by Ernest Skalski, Gazeta Wyborcza
The Insider, May 23, 1991

教会の役割に関する見解の違いも、「連帯」後に生まれた左翼グループとの連合の可能性に対する立場の開きも、また経済政策の相違も、民主同盟、市民運動民主行動（ROAD）、民主的右派フォーラム（FPD）の3つの政治潮流が均質的な1つの党を結成する妨げとはならなかった。5月11日、民主連合の創立大会が開催された。

新党の議長には前首相、タデウシュ・マゾヴィエッキが選出された。彼は、連合は「政治的責任感」によって結ばれていると説明した。

連合の評議会メンバーとして80名が選出されたが、最終的には各派代表が加えられて総数100名となる。

統一の提案は満場一致で採択されたが、ここにいたる過程で民主的右派フォーラム代表団内部で対立が生じ、副議長のミハウ・ヴイチャクをはじめとする20数名が不参加を決めた。

創立大会は、3派の代表によって準備されてきたプランを連合綱領の基礎とすること、綱領の最終文案は評議会メンバー100名の全員一致の承認を得ることを決定した。この原則は、小規模な民主的右派フォーラムがメンバー数のはるかに多いROADに圧倒されないための保証となる。

ゾフィア・クラトフスカ上院議員に率いられたROADの社会・リベラル派は、教会と国家の関係を述べた連合綱領の1条項について、ただちに議論を始めることを要求した。彼らは、国家機関と教会の協力に関する部分の削除を望んでいたとされる。

しかし綱領委員会のヤン・ロキタ委員長は、彼らに対して「真実を直視する」よう求め、まさにこの条項こそが3派の統一の核心をなすことを認めた。大会は、教会と国家の関係や政治生活における教会の役割といった最も議論の別れる問題については採決しないことを決めた。

〔訳：水谷　驍〕

© Jacek Marczewski/Spotkania

ブヤクの新党：社会民主運動

『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙から

Bujak's new party, by Paweł Lawinski, Gazeta Wyborcza
The Insider, May 9, 1991

ＲＯＡＤの創設者でありスポークスパーソンであったズビグニエフ・ブヤクが、４月20日に結成された新しい社会民主主義政党「社会民主運動」指導者になった。新党の結成は、ＲＯＡＤおよびタデウシュ・マゾヴィエツキが率いる民主連合からブヤクのＲＯＡＤクラブが最終的に分裂したことを意味する。ブヤクは次のように語った。

「われわれは民主連合との協力の可能性を排除しない。われわれは労働者と農民――われわれは彼らを防衛したい――からの支持だけでなく、青年や婦人――彼らをもっと政治に参加させなければならない――からの支持をも期待している。取るに足りない少数グループに転落する恐れはない。成功を確信している」。

ブヤクによれば、分裂の主要原因は党の綱領ならびにバルツェロヴィチ経済改革に対する立場をめぐる意見の相違にあったという。ブヤクは「民主連合がバルツェロヴィチ計画の続行を支持するのに対して、われわれはそれに反対する」とコメントした上で、新党がそれに代わる経済綱領を作成するだろうと付け加えた。

新党は、国会議員選挙の過程で綱領を発表するが、その中で「住宅を必要としているすべての人に住宅の提供」を公約するという。

ブヤクはさらに「われわれは堕胎禁止法案に反対である。これは女性と神の間の問題である」と語った。

社会民主運動は将来の選挙連合についてヤン・ユゼフ・リプスキの率いるポーランド社会党およびリシャルト・ブガイの労働者「連帯」の国会内会派など「本来の同盟者」との間ですでに交渉を始めている。

ブヤクは選挙運動では中央同盟［ワレサ派政党］が主要なライバルになるとみなしている。

社会民主運動の活動家は、スタニスワフ・ティミンスキの党「Ｘ」が主要な脅威になると考えている。なぜなら、この党がポーランド共和国社会民主党（ＳｄＲＰ）［旧共産党改革派主流の政党］といっしょになれば将来の議会で多数派となり得るからである。

左翼政党は共産党体制と同一視されており、こうした左翼政党にたいする抵抗感のために社会民主運動が失敗する恐れはないかとの質問にたいして、ブヤクは次のように答えた。

「今日まで、左翼の綱領はポーランド共和国社会民主党とポーランド社会民主連盟［旧共産党急進的改革派の政党］によってのみ提起されてきた。われわれはかつての共産主義者が左翼を独占するのを許しておくわけにはいかない。もしポーランドで社会民主主義的綱領の実現に成功しようとすれば、外国の社会民主党の支持を獲得しなければならない。ポーランド共和国社会民主党はこうした支持を獲得できないが、われわれならそれができる」。

〔訳：湯川　順夫〕

地下潜行当時のズビグニエフ・ブヤク

ポーランド日誌
1991年2月22日～3月20日

2月22日　ドジチムスキ大統領府スポークスマンによれば、ワレサ大統領は国会選挙を5月26日に実施するよう求めた選挙法案を国会に提出。●各地の鉄道ストに関連してミオドヴィチＯＰＺＺ［旧官製労組］議長は、政府の経済改革プログラムの変更を要求する。

2月23日　グダンスクで開催された「連帯」第3回大会は新委員長に、最有力視されていたワレサ側近のレフ・カチンスキを退け、無名のシロンスク出身の大学講師マリアン・クシャクレフスキを選出［本誌1991年4月号に関連記事がある］。●下院、白熱した議論のすえ1991年予算法を採択（賛成＝240、反対＝40、棄権＝56）。●下院、第2次世界大戦後に反共産主義活動を理由に下された有罪判決すべてを破棄する法案を可決。

2月24日　「連帯」大会、過剰賃金税反対決議と組合選出国会議員問題に関する決議を採択して閉幕。全国に拡大する勢いを見せている労働争議に対しては公式の態度表明はせず。

2月25日　ブダペストで開催されたワルシャワ条約機構会議で、同機構の軍事部門を4月1日に廃止することが決定される。●レドヴォロフスキ対外経済協力相によれば、コメコン諸国との貿易のドル決済の導入や西側の景気後退のため1991年の貿易収支の悪化が予想されるという。●ＯＰＺＺ、ボニ労働相の呼びかけに応じて、過剰賃金税問題に関する抗議行動を中止し、交渉の再開に同意すると発表。●政府、コメコンの廃止とこれに代わる新しい経済協力機構の創設を提唱。

2月27日　ポーランドとチェコスロヴァキアが軍事協力協定に調印。コオジェイスキ国防相によれば、これは軍事同盟ではなく、軍事情報の交換と訓練・武器生産の面での協力を定めたものという。●中国の銭外相が公式訪問のためワルシャワ着。4日間滞在し、この間にピエレツキ首相、ワレサ大統領らと会談の予定。

3月28日　ワレサ大統領、声明を発表、湾岸戦争の終結とクウェートの解放に満足の意を表す。●スクビシェフスキ外相、基地の調査を拒否したドブイニン・ポーランド駐留ソ連軍司令官を「好ましからざる人物」に指定する可能性を示唆する。

3月1日　ワレサ大統領、上院議長らと選挙法改正法問題について協議、投票日を5月26日として準備を進めるよう要請。●ポーランド農民党のバルトシチェ議長、6月30日を投票日とするよう提案する。●チェコスロヴァキア、ポーランド国境の自由往来禁止措置を解除。●国営農場ストライキ委員会の発表によれば、全国1800カ所の農場でストが続いているという。航空管制官やバス運転手などのストも。

3月2日　中央同盟［ワレサ派政治組織］の最初の全国大会が代議員400余名を集めてワルシャワで開幕。●旧秘密警察の活動を調べる上院調査委員会は、戒厳令布告直後の1981年12月ヴエク鉱事件（死者9名）の調査を終え、責任者5名の氏名を公表する。

3月3日　中央同盟全国大会、西欧流のキリスト教民主党の結成を決定し、委員長にヤロスワフ・カチンス

Jacek Marczewski/Spotkania

ティミンスキの新党「X」の結成大会に集まった支持者たち。

キを選出して閉幕。●ポーランド司教会議、妊娠中絶禁止法推進の教会の立場を強調した司教教書を発表。「信者の意志と信仰を効果的に表現できる政治勢力の組織化を目指す候補者に投票しよう」。

3月4日　ドイツとポーランドの環境保護相が会談、両国合同の協力委員会の設置に合意する。

3月5日　ビエレツキ首相、2日間の日程でドイツを訪問、コール首相、ゲンシャー外相らと会談の予定。

3月7日　ワレサ大統領、国会の解散と総選挙の早期実施を求めた書簡を国会に送る〔本誌5月号に訳出〕。

3月8日　労働省の発表によれば、ポーランドの2月末の失業者数は前月比で5.2%増えて126万人に。●昨日のハレンバ炭坑の爆発事故で4人が死亡。ポーランドでは鉱山事故で今年に入ってからこれまでに25名が死んでいるという。●ビエレツキ首相、日本の海部首相と電話会談、経済協力問題を話し合う。

3月9日　下院、大統領提出の憲法改正案および選挙法改正案をいずれも圧倒的多数で否決。代わりに秋の解散、総選挙を決める。

3月10日　市民委員会、中央同盟などが総選挙を秋に決めた昨日の国会決定を批判。

3月11日　ソ連の参謀長兼国防次官のモイセーエフ将軍が、駐留ソ連軍撤退問題の協議のためワルシャワに到着。4月から撤退開始で合意するも、撤退完了期限をめぐって対立が残る。●「連帯」全国委幹部会、選挙に関する国会決定を批判。●ＯＰＺＺ、過剰賃金税問題をめぐる政府との交渉が不調に終わったとして傘下組合に対する抗議行動中止指令を解除する。

3月13日　ワレサ大統領、ソ連訪問の公式招待を受ける。訪問は来月中にも実現の予定。

3月14日　前大統領候補スタニスワフ・ティミンスキが新党「X」の結成、登録を発表。●ワルシャワ地方検察庁、雑誌『Ｎｉｅ』にボルノ写真を掲載した疑いで共産党時代の政府スポークスマン、イエジ・ウルバンを起訴。

3月15日　フランスの蔵相が明らかにしたところによれば、パリで開催された対ポーランド債権国会議（これら諸国の債権総額は330億ドル）は債権の50%削減に合意したという。●政府と農民連帯、農産物の最低価格保証問題で合意ならず。

3月16日　クシャクレフスキ「連帯」委員長、きたるべき国会選挙に「連帯」も候補者を立てるが、いかなる政党からも独立して行動する、と語る。

3月17日　ポーランド在住ウクライナ人同盟、ポーランド国内のウクライナ系少数民族の地位は教育・文化の面では改善されたが、社会的・政治的にはまだ不十分であるとして、1947年のウクライナ人大量追放の断罪と、精神的・物質的損害の補償、新憲法と法律による少数民族の地位の保証を要求する。

3月18日　グダンスク造船所で労働者が賃上げを要求して座り込みストに入る。

3月19日　「連帯」全国委幹部会、国有企業の民営化は限定的にのみ実施すべきであると声明。

3月20日　ワレサ大統領の訪米を歓迎してブッシュ大統領は、米国の対ポーランド債権を70%削減すると述べる。●グダンスク造船所のストライキ終結。

［編訳：水谷　驍］

編　集　後　記

☆前号でお知らせしたとおり、ポーランド資料センターはこの7月で解散します。解散にともなう具体的措置は2頁に示したとおりです。ご理解のうえ、ご協力のほど、お願いします。

☆解散にともない、『ポーランド月報』も本号が通常号としては最後になります。次号は、終刊号として、1981年11月発行の創刊準備号から本号までの総目次と人名索引の特集号となります。

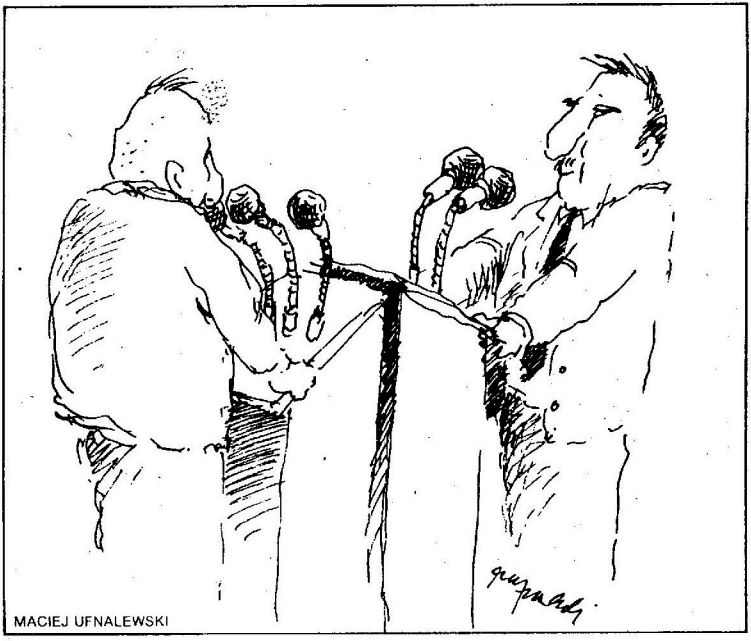
☆索引は全部で1,000項目を超えそうな勢いで、現在作業の最終段階に入っています。そのために終刊号は60頁を超え、定価も1,500円前後となります。バックナンバーの資料的価値が高まることを考えれば、けっして高価すぎるということはない、と考えますが、いかがでしょうか。

☆会員・読者の皆さんの「連帯」運動の10年に対する評価や感想、また資料センターの活動に対するご批判、ご感想をお寄せ下さい。6月15日必着。1200字前後以内にまとめていただければ幸いです。

☆解散にあたり、あらためて「連帯」運動の意味を考えてみようとささやかながらシンポジウムの開催を計画しています。ご期待ください。

☆［ソ連・東欧］資料センターの設立準備も進んでいます。ちかく具体的にご案内できるはずです。ご協力のほど、よろしく。　1991年5月25日（み）

ポーランド月報一九九一年六月号（通巻一一二号）
一九八四年二月一〇日第三種郵便物認可・一九九一年六月五日発行（毎月一回五日発行）



MACIEJ UFNALEWSKI

発行所・ポーランド資料センター
Center for Polish Research
〒177　東京都練馬区下石神井６－35－７
電話　03－3904－0427　　郵便振替　東京　２－81069
6－35－7　Shimo－Shakujii, Nerima－ku, Tokyo 177 JAPAN
定価４００円・年間定期購読料4600円（送料共）